

帽子大好き

帽子が好きだ。外出の時は必ずかぶる。年齢のせいで髪の毛がすっかり無くなって、暑さにも雪にも耐えられなくなったせいもある。それだけじゃない、帽子はむかしは男のものだった。いつの頃からか女のかぶるものになってしまった。女性の地位が男よりぐんと高まったからだ。私が帽子を重用するのは、男の復権を目指しているからだ、というのはちょっとこじつけだ。

明治時代から昭和の戦前期まで、まだ和服が普通だった時代は、女性の髪型が和風だったから帽子はとうてい無理だった。一方チョンマゲを無くした男達は帽子で髪をかくしたのが、流行の始まりかもしれない。巡査や兵隊、運転手などの制帽はもちろんだが、小学生、旧制の中学生、大学生も必ず制帽をかぶったし、一般人も職業によって帽子を変えてかぶっていた。紳士がかぶる山高帽、商家の主人の中折帽、丁稚さんなら前掛けに烏打ち帽と、身分や職業を示すものだった。

大学生が唯一かぶる角帽はかつては社会の尊敬の的でもあった。

それが今では、ピカピカの一年生がしばらくは黄色の登山帽(?)をかぶるくらいのもので、小中高大生のいずれの頭からも帽子は消えてしまっている。どうして帽子はきえたのか。身分を明らかにしないことで人間の平等性や匿名性を保つのが良いことだという世の中の考え方の変化が、男の頭から帽子を棄てさせたのだろうか。

私は学校を終えてからは、ずっと帽子のない期間が続いた。(スキーやゴルフの時は別だが)それが急に帽子に目覚めたのは十年ほど前のことだ。たまたま釧路に旅行をしていて、駅前通りに帽子専門店があるのに気付いた。奇妙に魁かれて店に入ったとたん一つの帽子に釘付けになった。人工のバックスキンで形は学生帽にそっくりだ。日本の男子にこの形は誰にでも良く似合う。以来この帽子はすっかり私の伴侶となり、同型の帽子をデパートやスーパーの売場でも必ず探すようにもなった。ずっと後になって、映画監督のあの黒澤明が愛用していたものと同タイプだった事も知った。年を経て黒色があせてグリーンに変色したが却ってカンロクが出た。

さて四月、これからのドライブもまたこの帽子と一緒にだ。